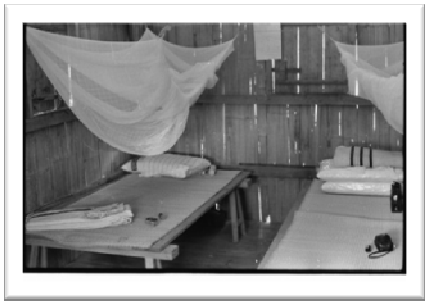
青年海外協力隊マレーシア会

会報　第８号　　発行　　2015.7.1

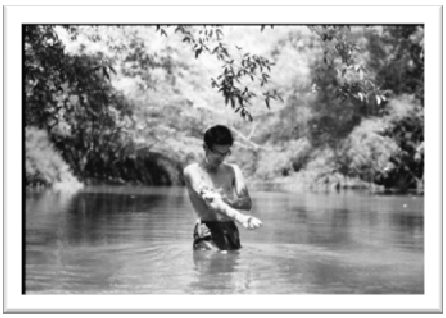
ＪＯＣＶマレーシア　昭和 40 年度 1 次隊（初代）

草野忠征（40-1、稲作）

宿舎の前で（本人）



宿舎の寝室



水浴び

１．派遣前訓練（「昭和４０年　新しい道を求めて　日本青年海外協力隊の訓練計画」より）

（１）隊員の人間像

イ．私利私欲を超越して、日本青年海外協力隊計画を推進するに必要な時には、いやな仕事、愉快でないことにも進んで携わる人。

ロ．生活の不便は勿論、孤独感に襲われ、身辺に危険を感じるような状況下でも、終始仕事に従事する情熱を持っている人。

ハ．自分とともに仕事をする相手国の人たちを理解し、融和し、他の隊員とも仲良く働くことができる人。

二．肉体的に過重な労働を必要とする、又、その活動分野を広く応用し、判断をあやまらず積極的に関心をもって行動できる人。

ホ．宗教、文化、民族的に異なった背景をもった国の人たちの見解、偏見に対処する態度、又それらの国々の直面する問題の理解に努めようとする豊かな人。

ヘ．我が国をよく理解し、我が国の正しい理解を他の国の人々に進めていける人。

この点については、「かっては武力国家、侵略主義と云われた日本、それが日本の辿るべき宿命の道であったにしろ、これからの日本人の“新しい夢”は世界に尊敬される文化国家、福祉国家の建設にあり、戦後２０年の復興はこの事が物語っている。協力隊員は、まず誇りを持って再認識し、日本とはこう云う所だと語ることのできる隊員であらねばならない」と付け加えられています。

（２）訓練重点項目

イ．語学

ロ．心身の鍛練

ハ．相手国の事情

二．日本人としての一般常識（我が国の事情及び世界情勢）

ホ．隊員としての心構え

（３）共同生活の規定

イ．本訓練は、全期間を通じて合宿制度であり、個人的な行動を認めない。
ロ．外出は認めない（但し、緊急やむを得ない事態が起こった場合は訓練所長の許可を得て外出を許可する）
ハ．訓練期間中は、外泊、飲酒は認めない。
二．服装は、所定の服を着用し、胸には名札を付けること。
ホ．規律や時間は厳守すること。
ヘ．他人の迷惑になるようなことをしてはならない。又皆で助け合うことが大切である。
ト．「ねまき」のままで居室外に出たりしてはならない。
チ．男子、女子ともに話し合うときは、ロビーか教室とかを利用し、互いに居室に入ってはならない。
と云うことで２ヶ月間カンズメの厳しい訓練でした。唯一楽しかった事は、国内事情研修のため開通したばかりの新幹線で京都への研修旅行をしたことです。又、コミュニケーション手法として綺麗どころの踊りのお師匠さんから「盆踊り」を教えてもらった事です。

２．協力活動

任地は、マレーシア サバ州（旧英領北ボルネオ）コタベル。
住民は、バジャウ族で厳格なイスラム教徒です。イスラムが嫌う豚を食べ、酒を飲む異教徒の日本人（しかも若造）が何をしに来たのか分ってもらえてないようでした。（当然です。終戦後初めて日本人が来たのですから）
それで、まず、私が所属（居住している）している農業普及センターで職員が、マンゴウやドリアン、ランブータンなど熱帯果樹の苗木作りをしているのを手伝うことから始めました。ここで現地の人とのコミュニケーションと語学習得を目指しました。これは自分（草野）を知ってもらう為でもありました。
生活は、明りは石油ランプ、飲料水は雨水、水浴は川でするという３年間の生活でした。

耕運機の運転操作実習

機械脱穀機の操作実習（右：本人）

薪を運ぶバジャウ族の子供

３．その後の人生にどう影響したか

協力隊経験は、私にとって大きな収穫でした。それは、大卒直後の何も社会経験のない若造で、しかも「酒も飲む」、「豚も食べる」イスラムの掟に反する行為をする異教徒の私（草野）を村人たちは許してくれた、イスラムの包容力の大きさを知ったことです。村人は、「異教徒の草野は草野」「イスラムの我々は我々」とはっきり割り切って、私に接してくれていたのだと思います。従って、その後の人生でも「草野は草野」「他人は他人」と割り切って思うと共に他人の立場を尊重するという考えになりました。隊員活動終了後 JICA 職員になって JOCV 隊員の支援をするに当たっても、隊員一人一人の個性を尊重し、JOCV ボランティアのボランティア（支援者）」という気持を持って勤務してまいりました。
今後とも協力隊隊員の活動を期待し支援していきたいと考えています。

協力隊活動とその後

石本馨（H7-1,作業療法士）

私は作業療法士として国内の病院に勤務した後 JOCV に参加、平成 7 年度 1 次隊で平成 7 年 7 月から平成 9 年 7 月までケダ州福祉局に初代隊員として配属された。同期配属の養護隊員と共に州内 11 か所（着任当時。終了時は 13 か所に増加）の地域リハビリテーションセンター（以下、PDK）を巡回し、障害児の訓練、家族や職員への指導、家庭訪問、等を行った。

隊員時代を振り返ると、活動できたのは先輩や同期の隊員、配属先の仲間、調整員その他多くの方々の支えがあったからだと思う。11 か所の PDK の中には障害児が来ない、近隣住民と折り合いが悪いなど、技術伝達以前の状態のところもあった。自分の存在意義に悩む日々が続いた時、同僚隊員の「初代隊員としての私たちの役目は、障害を持つ多くの人に PDK の存在を知ってもらい、利用する子供たちに楽しい思いを感じてもらうことだと思う」の言葉をきっかけに、住民への啓発活動や、関係機関への広報などにも携わった。特に印象に残っているのは、同僚らと共に保健所や現地企業と連携して啓発に取り組んだ PDK に、それまで一度も外出したことのなかった障害児や家族が通えるようになったことだ。ある親が「ここ（PDK）に来て、障害児がいるのは私だけじゃないことがわかった。ここに来れば仲間がいるので、悩みを打ち明けることができる」と言ったことは今でも覚えている。これをきっかけに障害者や家族が社会の中で生活することの大切さに気付き、それを応援する楽しみに目覚めた。

帰国後は専門学校と大学で作業療法士の養成に携わった他、NGO のワーカーとしてバングラデシュで活動し、現在は NPO 法人で作業療法やリハビリテーションの啓発活動に携わっている。隊員時代に気が付いた「障害者が社会の中で生活することの大切さ」を、若いリハビリテーション従事者に、更には一般の方々に知っていただくための活動をしている。その他、リハビリテーション関連職種の OV 会（JOCV リハビリテーションネットワーク）活動の一環として、東日本大震災の被災者支援活動を発災 1 か月後の 2011 年 4 月から福島県二本松市で続けている。JOCV への参加は多くの先輩・同期・後輩隊員との出会いを私に与え、仕事や活動の幅を、活動中のみならず帰国後の現在も広げてくれている。

ケダ州の PDK にはその後多くの医療福祉系隊員が配属され、後輩隊員の尽力により私が活動した時とは比べ物にならないほど発展した。最近も就労支援目的の隊員が配属されているとのことで、ケダの障害者と JOCV とのつながりは、まだしばらく続きそうだ。

＊写真＊

左：ケダ州 Yan 地区の PDK（平成 7 年当時）

右：被災者支援活動の様子（福島県二本松市の仮設住宅にて。右に写っているのはドミニカ OV）

マラッカでの活動報告

中山天志（H24-3、コンピュータ技術）

私はコンピュータ技術隊員として、2012 年 4 月から 2014 年 3 月までマラッカで活動して参りました。
配属先は設立から 10 年ほどの職業訓練校、2 年のプログラムで職業訓練(SKM:Sijil Kemahiran Malaysia)を取得と人間形成を行うことを目的としています。私が居たコンピュータ科と、自動車科、一般メンテナンス科の 3 つの学科がある全寮制の男子校です。学校が位置する Ayer Salak (阿依沙叻)は、街の中から少し離れた昔はジャングル今はパームヤシのプランテーションの中にあるカンポンチナです。

生徒は 16-20 歳くらい、半数がインド系と中華系、数名が「ユーラシアン」という構成で、カトリック・クリスチャン・ヒンドゥー・仏教徒が同じくらいの割合で居ました。ハラル設備を持たないのでムスリムの生徒は受入していませんでした。スタッフは約 30 名、インド系・サバハンがほとんど、少しのマレー系という構成でした。
入学してくる生徒は貧困家庭や孤児院からが主で、ほとんどが日本の高卒に相当する SPM を受けておらず、学校に行っていなかった/行けなかったなど基礎学力に問題があったり、読み書きが出来ない状態の生徒も少なからず居ました。そのため人間形成に重きが置かれています。半島マレーシアの色々な所から入学してくるので、年に数回の長期休暇に帰宅する以外は学校で過ごします。

生徒の日常は、朝は 6 時に起床から夜 10 時半の就寝まで、みっちりプログラムが組まれていて、語学・職業訓練・ライフスキルの 3 つを習得して行きます。私は朝 8 時半から 5 時までの授業の担当、学内のコンピュータやネットワークの整備、教材のアップグレードが主な仕事内容でした。
ほとんどの生徒が卒業後の進路は考えた事が無いようで、日本での社会人生活の紹介や同時期にシニアボランティアとして活動されていた小野沢さんの ADTEC（アローガジャ）を訪問したり生徒の個別面談をしたりといった事を通して将来の自分をイメージしてもらえたかなと思います。私自身が学校を卒業してすぐ就職するという日本式の職業(＝仕事)に対しての考えが強かったので、最初はその考え方の違いに馴染むのが難しかったです。
そのほか、Japan Art Mile というプロジェクトを通しての日本の学校との交流や、年に 1 回のイベント Open house で JICA ボランティアとブースを出したり、日本人と交流する機会を作る事が出来、視野を広げることに寄与できたかなと思っています。私自身も大いに楽しみました。

「マレーシア時間」など、日本と比べて時間にルーズな話を良く聞くマレーシアですが、
私の任地は時間に正確で、始業時間には全員揃っていたり、ティーブレイクやランチは必ず時間通り休憩をとる、終業時間も時間通りと、私よりキッチリしていました。宿題は nanti でしたが。

私は現職参加という制度を利用してボランティアに参加したので、現在は元いた会社に戻りシステムエンジニアとして働いております。
トロピカルフルーツや旅行スポット、なにより温かい気候と人たち・・・マレーシアはとても好きな第二の故郷になりました。

協力隊事業発足 50 周年記念

マレーシア会第 3 回総会は KL で開催予定である旨、前号でもお知らせいたしました。

協力隊の 50 周年記念式典は 11 月 17 日横浜のパシフィコ横浜で開催の予定です。そのほか第一次隊で派遣されたフィリピン、ラオス、カンボジア、マレーシア、ケニアは現地での 50 周年式典が予定されています。当マレーシア会の第 3 回総会は KL での 50 周年記念式典にあわせ開催したいと考えています。現在のところ平成 28 年 1 月 10 日頃ということで、関係部署との調整が進められています。詳細が決まり次第お知らせいたしますので、今しばらくお待ちください。

豆知識 1：今号トップの草野さん原稿にもあるように、青年海外協力隊は 1965 年、「日本青年海外協力隊」として発足、1974 年「青年海外協力隊」に改称。現在ではシニアボランティア、日系ボランティアを含む総称として「JICA ボランティア」と呼ばれることが多くなっています。

豆知識 2：協力隊駐在員事務所兼隊員連絡所（ドミ）は 1972 年に Jalan Nipah の庭付きバンガローハウスに開設されました。昭和 56 年（1981）に協力隊事務所が JICA 事務所と統合され、Jalan Ampang に移転。その後事務所が Jalan Yap Kwan Seng に移転したのを機に、ドミも Nipah から Jalan Aman へ。その後 Jalan Damai へ移転。さらに Vista Damai コンドミニアム（ツィンタワーが見えました）へ。それも 2012 年 7 月には閉鎖され、現在、隊員連絡所はありません。

――――――初めての地区集会開催される――――――

本会の懸案であった関東圏外での初めての地区集会が、「青年海外協力隊マレーシア会中部地区集会」と銘打って平成 27 年 2 月 14 日(土)、午後 2 時～7 時まで名古屋市にある「JICA 中部なごや地球ひろば」で開催されました。

東京からは、白山会長以下 6 名が参加し、地元中部から愛知県、三重県、岐阜県そして近県の長野県からのＯＶが参加、また愛知県青年海外協力隊を支援する会から坂本会長ほか２名の役員が参加され総勢 25 名となりました。

第一部では、愛知県出身である坂本真理子(S62/1 次隊、保健師)さん、石本馨(H7/1 次隊、作業療法士)さんの 2 名の OG による講演。坂本 OG は、サバ州で初めてのチーム派遣メンバーの一員として保健局の環境衛生業務を、コタキナバル(KK)から 150Km 北に位置するサリマンドゥ村において活動、またその後もサマリンドゥ村を訪問し、交流を続けている話を聞くことができました。石本 OG は、ケダ洲の福祉局で地域リハビリ活動に従事し、帰国後は福島(二本松)でのリハビリ教室を主催しています。活発な質疑応答もあり、盛会のうちに講演会は終了。その後、「なごや地球ひろば」の見学、第二部の懇親会と盛り沢山の充実したプログラムでした。中部地区集会の開催にあたり、石井範子(S58/1 次隊、幼稚園教諭、現 JOCA 中部支部長) OG の全面的な協力を得、成功裏に終了できました。この紙面をかりて感謝申し上げます。今後も、地区集会を継続して実施していきたいと思っていますので、実行していただける地区からの協力、宜しくお願いします。なお、石本さんの講演内容は今号に掲載しています。坂本さんは次号に掲載したいと思っています。

帰国報告会開催

1 月 31 日、JICA 市ヶ谷地球ひろばにて帰国報告会を開催いたしました。平成 23 年 4 次隊中山天志（コンピュータ技術）、原早恵子（作業療法士）両氏を報告者にむかえ、17 名の参加があり、その後の懇親会も和やかな会となりました。中山さんは今号に、原さんは前号に活動報告の原稿を掲載しています。

帰国報告会写真

中央二人が帰国報告者

帰国報告会の様子

50 周年記念協力隊まつり開催

4 月 11 日,12 日、市ヶ谷の地球ひろばで協力隊まつりが開催されました。延べ約 1500 名が来場。多様なセミナー（日本語ネットによる活動紹介、ベトナム、ブータンの研修員の話、北京パラリンピック「ゴール・ボール」出場の高田朋枝氏の講演等）、またパラグアイ、ペルーから音楽演奏、ガーナのダンス、ケニア野生動物のフィルム上映、世界の民族衣装着付け体験等、今年はバラエティーにとんだ 2 日間でした。マレーシア会は民芸品販売、民族衣装の貸し出し、着付け、マレーシア紹介、応募相談等行いました。2 日間、多くの OV がブース運営にかかわってくださり、にぎやかなまつりとなりました。ありがとうございました。今後の出展に向け、皆様からのイベント内容などアイデアをお待ちしています。写真左は民族衣装体験の高校生。

協力隊の日を祝う会

4 月 20 日の「協力隊の日」を祝う会が 4 月 19 日、東京・広尾の旧協力隊事務局・広尾訓練所前で JOCA 主催で行われました。金子会長の話や献花が行われました。慰霊碑の部分だけは JICA の資産として残すことが決まっています。
当マレーシア会からも副会長、事務局が参加いたしました。

訃報

パンさん（旧 KL 事務所秘書　70 年代）　12 月
小林明子さん（旧姓飯野）57.3　養護　2 月
森島啓司さん　56.1　生態学　4 月
突然の知らせに深い悲しみに包まれています。
これまでの活動に敬意を表するとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。

寄付のお願い

活動費として、寄付は随時受け付けています。よろしくお願いいたします。
振り込み先：
郵便局記号：10140　番号 51611341
（郵便局外から振り込みの場合：店番 018、
普通口座　5161134　です）
口座名義人：青年海外協力隊マレーシア会
代表　白山　肇

マレーシア会は国際協力サロン内に事務局を置きます。なお、この会報は青年海外協力隊マレーシア会会員と 2010 年の青年海外協力隊 OB/OG 会出席者に E メールもしくは郵送の形でお送りしています。配信を希望されない方はご連絡ください。また、会員は現在 490 余名ですが、まだ、会員登録されていない方には、是非マレーシア会のことお知らせください。

発行　青年海外協力隊マレーシア会 会長 白山肇
162-8433　東京都新宿区市ヶ谷本村町 10-5
JICA 地球ひろば　メールボックス 51
TEL：090-7186-1065（国際協力サロン）
MAIL：malaysia@ics-together.com
URL：http://ics-together.com/jocvmalaysia.htm